

**令和2年度Sport in Life推進プロジェクト**  
**(スポーツ実施を阻害する課題解決のための実証実験)**

**「インクルーシヴ・スポーツ学童」**

**「一般社団法人 飛騨シューレ」**

**2021年2月12日**

## 事業概要

- 障がいを持つ子供等あらゆる個性の子供たちに提供する「インクルーシヴ・スポーツ学童」を推進している。具体的には、スポーツ参加に当たっての障害となり得る、送り迎えや用具提供、補食等のサポートを提供しつつ、楽しく運動に触れられる機会の創出に取り組んでいる。
- 並行して、ペアレンティング（保護者教育）、グッドコーチングワークショップ（コーチ教育）を開催し、子供を取り巻く大人の意識改革にも取り組んでいる。

実証フィールド	岐阜県飛騨市神岡町桜ヶ丘1 桜ヶ丘体育館（体育室、会議室）
代表団体	一般社団法人飛騨シュレ
構成団体	飛騨市教育委員会、早稲田大学スポーツ科学学術院、運動器スポーツ医学研究室、岐阜県立飛騨神岡高等学校、ヨネックス株式会社、北都サービス神岡株式会社
ターゲット	子供（メンバー登録25名：神岡町内の保育園年長～神岡小学校1年生～4年生）、一般保護者、（こども対象のスポーツ）指導者

### 【インクルーシヴ・スポーツ学童、（子供向け①）】

送迎や用具提供、補食、学習支援等も含めて総合的に「スポーツ参加しやすい環境」を整え、無理なく、自然な形でスポーツと親しむチャンスを生み出す。

（具体的な活動）

- ・下校後、スポーツ施設への送迎
- ・お菓子等の補食、学習支援
- ・スポーツ活動（用具提供）



## プロジェクト実施内容

### 【ワークショップ（②保護者、③指導者向け）】

#### ②ペアレンティングワークショップ（保護者向け）

- 保護者はじめ子供を取り巻く大人の意識改革を促す。
- ・宮下充正先生…子供のころからの運動習慣の重要性を強調

#### ③グッドコーチングワークショップ（指導者向け）

- コーチングにおける引き出しを増やすため、指導者の学びの機会を提供した。
- ・佐藤晃一氏…決して無理強いしない、からだと心のケアや誤った身体の使い方を避ける方法を講義



## 2. スポーツ実施頻度や実施意欲の改善効果

「飛騨シューレ」

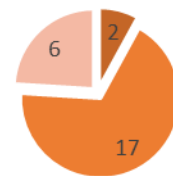
### 効果検証の概要

ターゲット	現状	目標	実績	効果検証方法
子ども	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲームが遊びの中心。子供がスポーツに触れる機会が少ない。</li> <li>・近隣に体育施設がないため保護者が送迎することが難しい場合がある。</li> <li>・金銭的理由でスポーツ参加がかなわない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとりでも多くの子供が「スポーツは楽しい」「スポーツ大好き」と認識し、スポーツをする時間が増える。</li> <li>・すべての子供（障がい、貧富、性別、民族等を超えて）に公平かつ平等にスポーツを楽しむ機会を提供する。</li> </ul>	「とても楽しかった」「楽しかった」と回答している者が25名中19名であり、スポーツの楽しさを伝えることに成功した。また、そのほとんどが事業参加への継続を望んでいることから、「楽しさを理解することがスポーツ実施の継続」につながることも示された。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○早稲田大学による活動量調査：事業前後に5日間「身体活動量計」を参加者に装着し、データを解析。同時に毎日の行動表と運動経験やQOL（身体・心理）に関するアンケートを実施。</li> <li>○飛騨シューレによるアンケート調査…最終日に「楽しかったかどうか」「続けたいか」「おやつの時間について」「嫌だったこと」「どんな学童ならいいか」など記述式のアンケートを実施。</li> </ul>
保護者	「勝利至上主義」や「厳しい指導が伴うこと」がスポーツに対するイメージ。子供を参加させるハードルが高くなっている。	定期的なペアレンティング・ワークショップの開催を通じてスポーツに対する固定観念を払拭し、参加ハードルを下げる。	事業への参加を通じて、子供のスポーツ参加に前向きなコメントが多く見られた。事業の継続を望む声も見られた。	アンケート：ペアレンティング・ワークショップに参加した動機（きっかけ）や感想、今後の希望。 電話ヒアリング：保護者に「スポーツ学童から帰宅した際の子供の様子」と「保護者の立場での感想」をヒアリング。
指導者	子供を取り巻く大人の意識改革のためには、指導者の資質向上が重要	定期的なグッドコーチングワークショップで指導者の資質向上を目指す。	客観的な指導方法のレクチャーを通じて自らの指導方法を反省する気づきが得られた、また、単発ではなく継続的な開催を望む声が多く見られた。	アンケート：グッドコーチング・ワークショップに参加した動機（きっかけ）や感想、今後の希望など

### 効果検証の結果

子ども	<p>25名にアンケート調査をおこなったところ、「楽しい」等と答えたのが計19名、25名中21名が今後も参加を希望していることから、スポーツの楽しさを子供たちが理解したと考えられる。</p> <p>また、楽しいと答えた参加者のうち15名が日程終了後も継続して本事業に参加している。「スポーツが楽しい」と理解することがスポーツ実施・継続に寄与していることが読み取れる。</p>
保護者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートの結果、「スポーツは楽しいものだ」という保護者の理解につながったことが読み取れた。また、機会がないこと、飛騨では体験しにくい種目を体験できたことを評価する声も見られた。</li> <li>・単にスポーツだけを提供するのではなく、「学習支援」や「送迎」と組み合わせることにより、保護者が子供を参加をさせるハードルを下げることも分かった。</li> </ul>
指導者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講師の客観的な指導や他の指導者とのワークショップを通じて、独りよがりな指導法ではいけないことを理解できた。</li> <li>・単発ではなく継続的なワークショップを望む者もみられた。</li> </ul>

図表(子供) 全体的な事業の感想



・すごく楽しかった ・楽しかった ・楽しくなかった

#### 楽しかった理由

いろいろなスポーツができた（10名）、特定のスポーツが楽しかった（7名）、おやつの時間 等

#### 楽しくなかった理由

仲間同士でのめめ事があった、コーチに叱られた、勉強の邪魔をされた 等

#### （保護者）主な回答

- 子供が帰宅後にする話を聞いて、「スポーツは楽しい」ものだ、ということがわかった。
- できるだけ子供にからだを動かせたいがなかなか機会を作れないので、今回の事業は助かった。
- 飛騨では経験できない種目があったよかった。
- 学習（宿題ができる）の時間が良かった。

#### （指導者）主な回答

- 講師のお話で「目からうろこが落ちる」思い。
- ひとりよがりの指導法を反省。
- 常に学ばなくては、と思った。定期的なワークショップを期待したい。

# 3. スポーツ実施改善の要因の分析（阻害要因や促進要因の仮説検証）

「飛騨シュール」

## スポーツ実施改善要因の分析結果概要

ターゲット	効果スポーツ実施の阻害要因、促進要因（事業実施前の仮説）	効果スポーツ実施の阻害要因、促進要因（検証結果）
子供	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地方（山間部）の子供は、ゲーム等の遊びが中心であり、都市部と比較して座っている時間が長い。</li> <li>・「インクルーシブスポーツ学童」に通うことにより、SB（座りがちな行動）からLPA、MVPA、VPA等（低、中、高の身体活動）が活発になると予想される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（計測中）活動時間（LPA、MVPA、VPA）の割合が増加。</li> <li>・（計測中）学童活動で友達と楽しく運動をすることを通じ、運動への参加ハードルが下がるとともにスポーツ継続率が向上し、参加前の活動量と比較して高強度の活動時間が長くなることが予想される。</li> </ul>
保護者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「競技が中心であり、参加のハードルが高い」といった、スポーツに対する偏ったイメージがある。</li> <li>・送迎など保護者のサポートが必要である。</li> <li>・用具購入に費用が掛かる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークショップでの講師や他の保護者との会話を通じて、スポーツに対するイメージが変わり、「楽しく・自由にできるスポーツのすばらしさ」や、発育への好影響について理解が進んだ。</li> <li>・また、子供を参加させたいという意向が参加前よりも強まった。</li> <li>・送迎や用具購入等のサポートにより、子供をスポーツに参加させるハードルが下がった。</li> </ul>
指導者	<p>指導者の意識が勝利至上主義に偏りがちであり、子供たちの楽しく自由なスポーツ参加が妨げられている</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の指導者との交流や講師のセミナーを通じて、多様な指導方法の可能性を理解した。</li> <li>・継続的なワークショップの開催を望む声が多く見られた。</li> </ul>

## スポーツ実施改善要因の分析結果詳細

**子供**

①実証後どのような変化が見られるか  
 （計測中）座位の時間が減り、活動時間（LPA、MVPA、VPA）が増える傾向がみられると予想。  
 ②活動量の増加により運動参加が活発になるか  
 （計測中）運動の機会を得て、運動する楽しさを知ること、通常の日常生活活動より少し強度の高い活動をする期間が増えることが期待される。

**保護者**

- ・子供を参加させたい意向が強まったと判断されるコメントが25人中20人見られた。これは、「スポーツに対するイメージが変わった」保護者が増えたことに起因していると考えられる。（15人が変わったと回答。）
- ・「用具」「送迎」「学習」のサポートが参加のハードルを下げたというコメントが10件寄せられたことから、スポーツ実施の周辺的なサポートがスポーツ参加を促進する大きな要因であると認識した。

**指導者**

「勝利至上主義」ではなく、「子供が楽しいと思える指導方法」がスポーツ参加率を高める上で重要であることが明らかになった。  
 ・継続的に講習会を実施し、指導方法のメンテナンスを行うことも客観性をもって指導をする上で重要であることが参加者のコメントより分析できた。

## （子ども）先行研究における都市部と地方部における小学生の活動量比較

	地方部：京都		都市部：東京		
	時間（分）	割合（%）	時間（分）	割合（%）	
装着時間	868.6		802		
SB（座りがちな行動）	459.2	<b>52.5</b>	363	<b>45.2</b>	
LPA （軽強度の身体活動）	歩行	92.6	10.7	105	13.1
	非歩行	261.4	30.1	225	28.1
	トータル	354	41.1	360	44.9
MVPA （中強度から高強度の身体活動）	歩行	26.7	3.1	39	4.9
	非歩行	24.9	2.9	28	3.5
	トータル	51.6	6	68	8.5
VPA （高強度の身体活動）	歩行	2.8	0.3	5	0.6
	非歩行	1.1	0.1	1	0.1
	トータル	3.9	0.5	6	0.7

都市部に住む小学生と比較し、地方部の小学生は全ての活動量の割合が低く、座りがちな行動の時間の割合が多い傾向がみられる。

先行研究（Chiaki Tanaka, 2017）と早稲田大学調査の比較  
 ※先行調査であり、本事業の結果は調査中。

## （保護者）事業後の主なコメント

- ・スポーツに対するイメージが変わった
- ・参加させたい意向が、事業前より高まった
- ・送迎・用具・学習のサポートが参加ハードルを下げた。

## （指導者）事業後の主なコメント

- ・子供たちが楽しくスポーツ活動を行えるよう、今までの指導法を見直したい。
- ・勝利至上主義からの脱却ができた。
- ・継続的なワークショップの参加を望む。



事業継続や  
横展開に向けた  
ポイント、課題

### ◆幅広い層を対象にしたインクルーシブな事業展開

- ・本事業を楽しみにする不登校の子供が、学校に行けるようになり、最終的には毎日通えるようになった事例があった。(ポイント)
- ・障がいのある子供の保護者より「入団を希望していたにもかかわらず、スポーツ少年団から断られたので、この事業に参加できるのは有難い。普通のこどもたちといっしょにスポーツ活動をさせたい。」という声があった。このニーズへの対応は引き続き意識したい。(ポイント)
- ・障がい者を含めた「インクルーシブ」な活動であることを理解した協力者の確保が重要。ただし、障がいのある子供に対して、どこまでサポートをすべきなのかについての見極めは今後も検討する。(課題)

### ◆地域人材の巻き込み

- ・ボランティアスタッフや地元高校生等地域の人材の巻き込みが重要である。ただし、スタッフによって対応の質・方針が異なることが原因となり子供に戸惑いを与えることもあった。指導の質を一定に保つようマニュアルの作成や講習会等を実施する。(課題)
- ・リタイアの原因にもなることから、子供同士のいさかい・けんか等のケアが重要。(ポイント)

### ◆スポーツ実施をサポートする環境づくり(送迎、補食の提供、学習の時間等)

- ・バス送迎は必ずしも好評でない部分もあった。見守りをしつつ、徒歩で会場に向かう送迎パターンも今後検討する。(課題)
- ・補食の提供については適切なタイミング・分量で提供することをこころがけた。今後も継続する。(ポイント)
- ・学習の時間をどのタイミングで持つべきか、宿題後のスポーツ活動の方が充実感がある可能性もあり、今後検討する。(課題)

次年度以降の  
事業継続、  
横展開の計画

### ◆次年度事業について

- ・今年度の活動を受け、来年度は自主財源にて事業を継続する予定である。
- ・但し、自主財源なので本年度とは異なり可能な範囲での対応となる予定である。ただ、地域の高校生やボランティアスタッフのサポートの協力も得つつ、できる限り本年度並みのプログラムの展開を目指したい。
- ・他地域の総合型地域スポーツクラブとの連携等を通じて、同種事業のノウハウの共有や協力イベントの開催を計画している。

### ◆事業スキームや適切な費用負担の検討

- ・自主財源でカバー可能な範囲は限定的であるため、必要に応じて費用負担を求めつつ、持続可能な事業スキームの検討を行う。

今後の事業展開に  
向けて期待される  
sport in Life  
プロジェクト  
における取組

### ◆他の総合型地域スポーツクラブや近隣スポーツ団体との連携促進

- ・スポーツ庁が主催となり、「他の総合型地域スポーツクラブ」と意見交換をする機会を設けていただけるとありがたい。特に、遠方の地域との意見交換は移動が必要となり難しいため、WEBでの意見交換も検討可能ではないかと考えている。
- ・総合型地域スポーツクラブに限らず、近隣地域で同種事業に取り組み連携が見込める団体とのマッチングの場を設けていただきたい。

### ◆コロナ禍に対応したスポーツ学童の在り方の検討

- ・我々の事業は単純なスポーツの機会の提供に加えて送迎や補食、学習の時間等もあるため、感染症対策の観点が多岐になると考えている。このような事業を展開する事業者に向けて、コロナ禍における活動の在り方を議論する機会を設けていただいたり、「コロナ対策の事例を集めたガイドブック」を作成いただくことも検討いただきたい。